

## 福岡について

——「喪」をとらえなおす——

後山剛毅

はじめて原爆文学研究会に参加して三年が経つ。はじめての参加は、二〇一八年一二月二二・二三日に開催された第五七回研究会だつた。思えば、もう半年早く参加する予定だつたが、七月二八・二九日の研究会は、初日に扁桃腺が腫れて欠席し、二日目は関西地方に台風が直撃し中止となつた。初参加以来、予定が会うかぎり、定期的に参加してきた。僕が参加するようになつて、たまたまなのだろうが、例年二二月の研究会は福岡市で開催されている。

一年に一度、福岡を訪れることが楽しみになりつつあつた。福岡までの小旅行のお土産として博多の料亭稚加榮の明太子を購入する。京都に戻つて、それを日本酒のアテに誕生日、大晦日、元旦と味わうのが習慣になりつつあつた。それが昨年來のコロナ騒動でパ一になつた。人間、年に一回決まつた土地を訪れるのも容易ではないらしい。生活の一部になろうとしていた習慣がコロナになつて難しくなつた。

さて、コロナ禍のなかで、人間の大量死と喪の問題が注目を集め

ている。二〇一九年、所属研究科紀要に投稿した論文「原民喜作品における原爆の記憶——二つの「死」に注目して」が、二〇二〇年のコロナ禍に入つて刊行された。原民喜（一九〇五～一九五二）の二つの作品群——「美しき死の岸に」と「原爆以後」に注目して、それぞれの「死」の描写の違いから、原爆以後に人を追悼する——「喪」の問題を再考する試みだつた。東京の友人が、ジョルジオ・アガンベン（一九四二～）の「死者の権利」の議論に絡めて、原民喜の作品が「個別」の「喪」に服す「生者」の権利にも関係するという好意的な感想を寄せてくれた<sup>(1)</sup>。コロナ禍の大量死のなかで、個別の誰かの「喪」に服するということについて考えるきっかけとなつた。このテーマが先鋭化したのが、二〇二〇年一〇月二三日の父の死だ。批評家の東琢磨（一九六四～）に誘われて執筆した渡哲也（一九四一～二〇二〇）の追悼原稿の校正を終えた二日後のことだつた<sup>(2)</sup>。渡論では、『愛と死の記録』（一九六六）における渡の表情の演技に「瞬間的な死」の硬直を見いだし、その話を原民喜の「火

の子供」における「瞬間的な死」が人の日常のなかに潜んでいると  
いう話に絡めて論じた。そして、その「瞬間的な死」の演技が『時  
雨の記』（一九九八）の狭心症に苦しむ壬生孝之助にも見てとれる  
と繋げた。そして、壬生は心筋梗塞で亡くなつた。

コロナ禍において、突如として急性心筋梗塞で亡くなつた父を、  
渡の演じた壬生に重ねずにはいられない。そして、原爆という大量  
死のまえに、最愛の妻の「美しい死」を看取つた原民喜のことを想  
起せざにはいられない。二〇一九年の論文執筆時には、いかにして  
原が「原爆死」と「美しい死」のあいだを架橋して思考しようとし  
たのかということに関心があつた。しかしながら、コロナ禍の父の死  
を経て、二つの「死」のあいだにある距離をとらえなおすことに関  
心が移りつゝある。

やはり大量死と個別の死の関係を原民喜の作品を通して再考し  
なければならない。そのことがこの一年あまりで先鋭化された。コ  
ロナになつて不可能になつた福岡旅行。福岡という土地に惹かれて  
やまないのは、父が一年に一度競馬のために必ず訪れていたからか  
もしれない。

## 注

1 アガンベンによるコロナについての論稿は次のものを参照した。ジョル  
ジュ・アガンベン「説明」（高桑和巳訳、『現代思想』第四八卷第七号、

青土社、二〇二〇年、二〇一二二頁）

2 渡哲也の追悼原稿は以下のもの。後山剛毅「渡哲也の記憶——広  
島と呉から」（『文藝別冊 渡哲也 昭和の映画俳優“仁義”の栄光』  
河出書房新社、二〇二〇年、一七六一一八三頁）